

94 在東向寺有感

東向寺に在り感有り
とうこうじ

東向寺前夕日頽

東向寺前 夕日 頽る
とうこうじ ぜん せきじつ くだ

法幢影閃暮風哀

法幢の影閃めてき暮風 哀し
ほうとう ひら ぼふう かな

山翁溪女風眞率

山翁 溪女の風眞 率
さんおう けいじょ ふうしん りつ

各把香華供佛來

各 香華を把りて佛に供しに來る
おのおの こうげ と ほとけ きよう きた

供佛香華情亦眞

佛に香華を供す情亦眞なり
ほとけ こうげ きよう しい

苓州客淚為沾巾

苓州の客 淚 巾を沾すを為す
れいしゅう かく きん うるお

天涯風雨中元近

天涯の風雨中元 近く
てんがい ふうう ちゅうげん ちかく

誰是故山扨掃人

誰か是れ故山の扨掃の人
たれ こそん はいそう

扨掃託人猶未還

扨掃の人に託して猶お未だ還らず
はいそう たく な いま かえ

泣望落日淚潜々

泣いて落日を望めば淚 潜々
らくじつ さんさん

雪泥鴻爪無蹤跡

雪泥 鴻爪の蹤跡 無し
せつでい こうそう しせき

未識何山瘞骨山

未だ識ず何山 骨瘞の山

休言瘞骨處如何

言い休よ骨を瘞める處 如何ん

會把形骸任太虛

會いて形骸を把り太虚に任す

但憂未遂平生志

但だ憂う未だ平生の志を遂ず

欲向名山藏底書

名山に向わんと欲して底に書を藏す

藏向名山豈素志

藏して名山に向わんと欲して豈素志

強彈一曲侍知音

強いて一曲を彈ずれば知音に侍す

南薰未起西風冷

南薰未だ起たず西風 冷やかなり

唯有秋蟾識此心

唯だ秋蟾 此の心を識る有り

語釈

東向寺とうきやうじ 寺の名。夕日ゆきじつ 夕日、夕陽、夕方、顔かほ 傾かたむく、崩れる、破れる、毀れる、衰える、疲れる、くずす。暮風ぼふう 暮れぼの風。哀あひ 哀しい、哀れ。法幢ほうとう 寺院の旗、仏堂の飾り旗。閃ひらき 閃ひらく、閃光。山翁さんゆう 仙人。溪女けいじょ 仙女。風ふう 風、風習、風俗、風体。眞しん 本ほん当、真に。率りつ 率りついる、引率。各かく 各々、それぞれ、めいめい。香華かうけ 香と花。把は 握、持もつ、握る、掴む、把る。供きよう 供きようえる。荅州たいしゅう 天草。巾きん 手布巾、手拭い。沾てん 濡れる、

濡らす、潤う。天涯てんがい空の果て、限りなく遠い。風雨ふうう雨や風。中元ちゅうげん道家の節日、中元、旧暦の七月十五日、上元、正月十五日、下元、十月十五日、佛徒は盂蘭盆會を行い死者の霊を供養する。故山こさん古里、故郷。拜掃はいさう墓に参り掃除をする。託したく委託、頼む。落日らくじつ日が落ちる、ひが暮れる。潜々さんさん涙が流れるさま、雨がばらばらと降るさま。雪泥せつじ雪や泥。鴻爪こうこう鴻の爪、風の爪。蹤跡しせき足跡。識し認識、知る、印す。何山なにやま何の山。骨瘞こつえい骨を埋める。瘞えい埋める、土中に埋める、墓。休すきゅう、窮す、万事休す、止める。處ところ所。如何いかいかが、どうか。形骸けいがい精神の抜けた身体、肉体形だけの身体、抜け殻。太虚たいきょ大きな空虚、大空。任にん任す、委任。憂ううれ思い悩む、心配する。遂すい未だいま未だに目的を果たせない。平生へいせい日頃、日常。名山めいざん名高い山。藏欲そうよく収蔵を希望する。藏すそう収蔵した、する。豈あに願う、どうして。素志そし元からの志、初めからの考えと望み、宿志、素意、素念。強し強いる、強く、強い、強制。一曲いっきょく曲の一つ。彈だん弾く、演奏。侍じ侍る、待つ。南薰なんくん穏やかな南風。秋月しゅうづ秋の月。蟾せんひき蛙。識し認識、知る。秋蟾しゅうせん秋の月。

通釈

東向寺の前夕陽が西に傾く、寺の飾り旗の影が閃き暮れの風哀しく、山の仙人溪谷の仙女の風真に率いて各々香おのと花を持って仏に供えに來た。仏に香華を供える情また真である、天草の客涙で手拭いを濡らす、空の果ての風雨に道家の節日中元も近く、誰か故郷の墓に参り掃除をする人。墓に参り掃除をする人に頼んで猶未だ還らない、泣いて落日を望めば涙が雨が降るように流れる、雪や泥に鴻の爪の足跡もない、未だに知らない何の山骨を埋める山。云い止めず骨を埋める処如何いかん、逢って精神の抜けた体を取り大空に任す、但し愁う未だ平素の志を遂げず、名山に向かいたいと思ひ底に書を収蔵した。収蔵して名山に向かいたいと思ひその始めからの考えと望みを、強く曲を一つ弾けば知ってる音韻を侍す、穏やかな南風未だ起きず秋の月此の心を知る。

95 別筍園

筍園に別れる

家住防州錦帶橋

家は防州に住す錦帶橋

々邊水接紫溟遙

橋邊の水に接す紫溟 遙なり

風帆可通書信

風帆幸に可なりを書信を通ず

不似潯陽江上潮

似ず潯陽 江上の潮に

語釈

筍園じゅんえん 防州ぼうしゅう

山口県周防の國、岩国。

錦帶橋きんたいきょう 日本三奇橋。

橋邊きょうへん 橋の辺り。

溟紫しめい 紫色の暗い広い海。遙ように書信しよしん 遙かに書

や信書。

風帆ふうはん 可なり

帆掛け船の運行が出来る。似にず 似ない。

潯陽しんよう 唐代の地名、今の江西省九江縣。

その付近の揚子江を潯陽江と言う。江上かうじやう 揚

子江の上、揚子江の辺、川の辺、川の上。潮ちよう 潮、あげしお、潮州。

通釈

家は防州に住む錦帶橋、橋邊の水に紫の暗い海は遙かにに接す、帆船も幸いに航行できて書や書信を通じ

る、似ず唐代の西省九江県の揚子江の名潯陽 揚子江の潮に。

9 代任令和尚哭其故人某妻

任令和尚其の故人某妻 哭す代る

艶花芳草[□]長存

艶花 芳草長く存すは[□]く

尚恨風霜泣墓門

尚お風霜を恨みて墓門に泣く

二十五年梵一覺

二十五年の梵 一覺

秋寒遙夜美人魂

秋寒し遙夜 美人の魂

語釈

任令^{にんれい}||和尚の名。和尚^{わしう}||僧侶、坊主。哭す^{こく}||慟哭、泣く。故人^{こじん}||亡くなった人。某妻^{ぼうさい}||氏名不詳の妻。艶花^{えんか}||艶やかな花、美人。芳草^{ほうそう}||

香しい草、佳い香りの草、佳人^{かじん}。□^は||難しい、固い、遂に、そのまま、出来ない、頗る、そこで。恨む^{うら}||痛恨。風霜^{ふうそう}||風や霜、年月、歲月。墓門^{ぼもん}||墓。

梵^{ぶつ}||清らかな汚れないさま、清風が吹き渡る、茂ったさま。一覺^{いつかく}||覚える、自覺。遙^{よう}||遙かに。美人^{びじん}||美しい人、女。魂^{こん}||魂。

通釈 艶やかな美人佳人は長く生きるのは難しい、猶歲月を恨んで墓前で泣く、二十五年の清風が吹き渡るのを

覚える、秋は寒い遙かな夜美人の魂が。

97 大村渡邊吉川諸君置酒觴余

醉後走筆似諸君

おおむら わたなべきつかわしよくん
大村で渡邊吉川諸君置酒の觴 余は酔後
しよくん じ
筆を走せ諸君に似す

崎陽近日多奇病

きよう きんじつ きびよう
崎陽の近日 奇病多し

家々送柩哭聲哀

いえいえ きゆう こく こえ あわ
家々 柩を送り哭す聲 哀れ

吾自崎陽至此地

われ きよう
吾 崎陽より此の地に至る

鐘鼓馭鬼聲如雷

しやうこ おに らい
鐘鼓の鬼は馭けて聲雷の如し

喧傳此病自夷至

けんでん やまい い いた
喧傳す此の病 夷より至ると

訛言洵々水襄臺

かげん きようきよう すいじようだだい
訛言す 洵々と水襄臺に

此病本生陰陽逆

やまい もといんよう ぎやく しよう
此の病の本陰陽から逆に生ず

飲食不節為之媒

いんしよくせつ これ ばい な
飲食節せず之を媒すを為す

蚩民不知病根蒂

しみんやまい こんてい
蚩民病の根蒂を知らず

呼做病魔可憫哉

びようま な あわれ べ かな
ああ病魔を做すと憫む可き哉

君不見更有沈痾甚於此

ちん あ こゝ おい はなは
君は見ず更に沈痾する有りと此に於て甚だし

其病亦自洋夷來

倫安苟且病日長

殆使天日西方類

世事糜爛既至此

不如相對願一杯

以上係西遊中所作年二十八

其の病亦た洋夷より來たる

苟安に倫い且らく病は日びに長ず

殆ど天日 西方に類れ使む

世事 糜爛 既に此に至る

如かず相對して一杯を願すを

以上西遊中に係わりて作す所 年二十八

語釈

大村おおむら 長崎県大村市。渡邊吉川わたなべきつかわ 人名。諸君しよくん 皆、皆さん。余よ 南部五竹なんぶごちく。觴しやう 盃、杯。觴さかすき 醉後すいご 酔った後、酒を飲んだ後。似すじ

示す、似す、似せる。崎陽きやう 長崎の中國風な呼び方。近日きんじつ 近頃。奇病きびやう 奇妙な病。家々いえいえ それぞれの家、多くの家。柩きう 棺桶、棺。哭すく 泣く、慟

哭。吾崎陽われきやう を自より 私わたし は長崎から、より。至るいた 来た。鐘鼓しやうこ 鐘や太鼓。鬼駟聲くせい をし 鬼が大声を上げながら駟け雷らい。雷らい 雷、雷。喧傳けんでん 喧しく伝

う。病夷やまい 自より 至るいた 病夷やまい より、外国から来た。訛言かげん 偽りを言う、出鱈目を言う。洶々きやうきやう 騒ぎどよめく、がやがやと諍い争う、波が湧き立つさま。 。

水臺すいだい 「水槽の台、高台の貯水池。」病やまい 病氣。陰陽いんやう 陰と陽、天地の万物を作り出す二つの氣、天地、日月、寒暖、男女のように相對する二つに氣。裏

上うへ がる、挙げる、高い、昇る、乗る、取り除く、払う。本もと 根本。逆さか 反対。生ずしやう 生まれる。飲食いんじき 食事、飲み食い。節せつ 節度、その折りに。媒

介かい する、取り持つ。蚩民しみん 愚かな民、知らない民。蚩し 虫の名、笑う、侮る、愚か、馬鹿、醜い、乱す。根蒂こんてい 根本。蒂てい 果実の蒂、萼、根本、

僅わずか かな、差し障り。病魔びやうま 人病、体に取り付いて病氣を起こさせる魔物、疫病神。做さく 作る始める、成し遂げる、発する。憫びん 憐憫、憐れむ。甚じん 甚

だしい、激しい。沈痾ちんあ 沈み拗れた病。洋夷やまい 自來。西洋、夷狄から、より来る。倫たぐ 道理、類、序で。天日てんじつ 太陽。類たぐ 傾く、崩れる、破れる、

毀れる衰える、疲れる、くずす、従う、禿。世事せじ 世間の事柄。糜爛びらん 爛れて崩れる、ひどい眼に合わせる。此この 至る ここまで来た。相對あひたい 互いに会う。

一杯いっぱい＝一つの杯。盃き。願き＝懇ろに、長い高い、丈が高い。西遊さいゆう＝西に遊ぶ、筑紫に、九州。

通釈　長崎の近頃珍しく不思議な病が多い、家々に棺ひつぎを送り慟哭する声哀れ、私は長崎より此の地に來た、鐘や太鼓の鬼は駆けて雷のようである、喧しく伝える此の病外国より來たのだと、出鱈目を云う騒ぎどよめいて水を揚げる台「高台の貯水槽」此の病元々陰と陽の逆より生まれる、飲食の節度を守らないと之を媒介する、愚かな民は病の根底を知らない、嗚呼病魔作すと憐れむべきであろう、きみは見たか更に沈み拗れた病が有ることを此処に於いて甚だしいのを、其の病西洋より來たと、いやしくも安らかな類且つ病日々長じる、殆ど太陽は西方より傾く、世間の事柄は爛れて崩れる既に此処に至る、相對して一つの杯を高くするにこしたことはない。

98 送栗栖子共之江都二首

栗栖子共の江都に送る二首
くりすしきょう こうつこ

誰使神州殆陸沈

神州 誰を殆どは陸は沈せり
しんしゅう だれ

滿天殺氣晝陰々

滿天の殺氣 晝なお陰々たり
まんてん さつき ひる いんいん

即今東望襟將濕

即今 東望すれば襟 將にを濕す
そくこん とうぼう えり まさ うるお

不獨別離傷我心

獨りならず別離 我が心を傷しむ
ひと べつり

四海嗽々鼎沸世

四海に嗽々と鼎 世に沸く
しかい べういとう かなえ

千山渺々遠遊人

千山 渺々として遠遊の人
せんざん びようびよう えんゆう

試看韶歲繁華地

試みに看る 韶歲 繁華の地
こころ にひやくさい はんか

今日寥々花柳春

今日 寥々花柳の春
けふ りようりようかりゅう

語釈

栗栖子共 栗栖天山、南部五竹と共に岩国誠忠三士の一人。江都 江戸。誰使す 誰がさせる。神州 日本國。陸沈 陸地が沈む、人が

世の中の姿を隠して居る、世が乱れて滅びること、頑固で世の移り変わりを知らないこと。 滿天 点に満ちる、空一杯に。殺氣 陰惡な氣配、殺伐な氣配、戦争の氣配、草木を枯らす冬の寒氣 陰々 陰氣、寒々と。襟を濕す 襟を湿らす、涙で。將 將に、正に。別離 別れ。心傷す 感傷、心を

傷める、心配。獨ひとならず一人でない。四海しかい四方の海の内、四方の胡、夷、戎、四方の海、東海、西海、南海、北海。嗷々うわう喧しい、騒がしい、憂い騒ぐ。鼎沸かなえわく青銅製の食物を煮る器、釜、罪人を煮殺すのに用いた、故に鼎、釜の湯が沸く。千山せんざん千の山、多くの山。渺々びようびよう遙か、水が広々と果てしないさま、幽か、極小さい。韶歳にひゃくさい二百才、二百年。繁華はんか賑やかに栄える。寥々りようりよう寂しく静かなさま、疎かなさま。花柳かりゅう花と柳、色々な模様、美しい景色の所、色里、花柳界、遊里、色里。

通釈 誰を使す吾が日本殆ど頑固で世の移り変わりを知らない、空一杯に殺伐な気配がして昼猶寒々としている、

即今東を望めば襟を將に潤す、独りならず別離に私の心を傷ましめる。四方の海に騒がしく釜の湯が沸くような世に、多くの山遙かに広々として遠くに遊学する人に、試しに看る韶年賑やかに栄える地、今日寂しく静かな美しい景色の春を、

9 送後藤子恭之江都三首

後藤子恭の江都に送る三首

落花滿地雨初乾

落花 滿地 雨 初て乾く

行色匆匆行路難

行色 匆匆として行路 難し

錦水青楊春老折

錦水の青楊 春 老い折れば

富山白雪夏中看

富山の白雪 夏中に看る

白雪蛾々白雲間

白雪 蛾々として白雲の間

知君仗劍過函關

君を知る仗劍 を過る

君過函関子細看

君 函関を過り子 細やかに看

依然猶是扶桑山

依然として猶お是れ扶桑の山

扶桑第一玉芙蓉

扶桑 第一の玉 芙蓉

莫使胡人汚此峰

胡人を使しむ莫れ此の峰を汚すを

虎踞龍蹯元_二匡_一侍

虎踞^{こきよ} 龍蹯^{りゅうはん} 元^{もと}もと侍^{たの}むを_二匡^{かた}

毛公畢竟準如龍

毛公^{もうこう}の畢竟^{ひつきよう} 龍^{りゅう}の如^{ごと}く準^{じゆん}ずる

語釈

後藤子恭^{ごとうしきやう} 後藤 後藤敬臣、本文の毛筆の序文。江都^{かうと} 江戸。落花^{らくか} 花が落ちる。滿地^{まんち} 地に満ちる。行色^{ぎやうしき} 行く気配。匆匆^{そうそう} 忙しい、

慌^{わう}ただしい、心の明らかなさま。行路^{ぎやうろ} 行く道。行程^{ぎやうてい} 難^{なん} 難しい、困難、嶮しい。錦水^{きんすい} 錦川の水。青楊^{せいよう} 青い柳、楊^{やう}。春老^{しゆらう} 春の終わ

り。折^{せつ} 折る、折れる、節。富山^{ふさん} 富士山。白雪^{はくせつ} 白い雪。夏中^{かちゆう} 夏の間。看^{かん} 見える、看^みる。蛾々^{がが} 山の高く聳えるさま、山の高大なさま、姿の立派

なさま。白雲^{はくうん} 白い雲。仗劍^{じやうけん} 強者の劍、守りの劍、天子の護り。猶是^{ゆうぜ} 猶是^{なほこれ}。過^かす 通過、過ぎる。函關^{わんかん} 函谷の関の略称、箱根の関所。子細^{しさい} 詳

細、事細かく。依然^{いぜん} 元^{もと}のまま、昔を恋慕うさま、樹木が茂るさま。扶桑^{ふさう} 神木の名、日の出る辺りの海中に有ると言う菩薩花、山海經、扶桑の有る

ところ日本を言う、琉球木槿。第一^{だいいち}の玉^{ぎよく} 一番の美玉、宝玉。芙蓉蓮の花^{ふようれん} 美人の形容、木芙蓉は富士山の別名。莫^なれ 無かれ、有^あつてはならない。胡人^{こじん}

夷^い、狄^{てき}、戎^{じゆう}、胡^こ、外国人。汚^{けが}す 汚す、汚辱。此峰^{このほう} 此の峰、富士山。虎踞^{こきよ} 虎が蹲踞する、蹲^{すん}る、しゃがむ、足を投げ出して坐る、寄りかか

て坐る。龍蹯^{りゅうはん} 龍の足の裏。元^{げん} 元々。元々^{げんげん} 固^かい、難^{なん}しい、出来ない頗^{ひん}る、遂に其処で、そのまま。侍^じ 頼^{たの}む、頼^{たの}る、頼りにする、自負する、母。

毛公^{もうこう} 毛利公。畢竟^{ひつきよう} 終極、結局、つまり。

通釈

花が落ち地を満たし雨初めて乾く、行く気配慌ただしく行く路は嶮しい、錦川の青い楊も春老いて折れば

富士山の白雪を夏の日にも看る。白雪は山高く聳えて白雲の間にあり、君を知る天下の護り箱根の関所を過ぎるを、

君箱根の関所を過ぎり事細やかに看よ、樹木が茂り元のまま猶これ富士の山。日本第一の玉のように美しい富士の

山、西洋の胡汚すでないぞ此の峰を、虎が足を投げ出して座る龍が足の裏を元々恃むは難しい、毛利公の終局は龍の如くに準じる。

100 春日書懷

春日しゅんじつの書懷しよかい

晚鴉飛尽夕陽春

晚鴉ばんがらす 飛つくび尽せきす夕陽せきようの春

酌酒簾亭酒味濃

簾亭きていに酒くを酌くめば酒味こまや 濃こまやかなり

処々尋花去不厭

処々しよしよ 花はなを尋いね去いるを厭いとわはず

三春身似一狂蜂

三春さんしゅん 身みは一いち狂蜂きやうほうに似にたり

語釈

春日しゅんじつ 春の日。書懷しよかい 書しよを思おもう。晚鴉ばんがらす 晚ばんに歸かへる鴉がらす。尽つくす 尽つくきる。夕陽せきよう 夕日せきじつ。酌くむ 酒しよを飲のむ。簾亭きてい 酒亭しよていの旗はた。濃こし 濃こい、濃こか。
鮮しよしよ 処々しよしよ 一いち狂蜂きやうほう 一匹さしゅんの狂きやうった蜂ほう。三春さんしゅん 春の三ヶ月、孟春、陰曆正月、仲春、にがつ、季春、三月、三度の春、三年。

釈文 晩になり埒ねぐらに歸る鴉も飛び去る春の夕暮れ、旗のはためく酒亭で酒を酌めば味はまた濃こいい、あちらこちら

を花を尋ね去り難い、春の三ヶ月私は一匹の狂った蜂に似ている。

101 錦水矚目

きんすいしよくもく
錦水矚目

村々勝景拉朋探

そんそん しやうけい とも
村々の勝景 朋の探るを拉く

山展修邑水拖藍

ひら むら
山は展けて邑を修めて水は藍を拖き

最愛斬新柳色好

ざんしん
最も愛す斬新 柳色 好し

淡烟横在錦橋南

たんえん きんきやう
淡烟 横たわりて錦橋の南に在り

語釈

きんすい 錦水 錦川、錦帶橋の架かる川。矚目 じつと目をとめて見る、注目する、或人の将来に期待を持って見つめる。勝景 しょうけい 朋 とも 朋友

友、仲間。拉し うれし 辟く、押し辟く、引っ張る、人を無理矢理引っ張って行く。展け ひら 開ける、拓ける。邑 むら 村、里。拖く ひ 引く、引きずる、引っ張る。

藍 らん 藍、たで科の一年生草本、青色の染料をとる。斬新 ざんしん 際だつて新しく鮮やかなこと、物の切られた痕の新鮮なことからいう。烟 けむる 煙る 錦橋 錦

帶橋。在り あり 有り。

釈文 あちこちの村の景勝を朋を招いて探るを、山は開けて邑を修めて水は藍を引き、最も愛す際だつて鮮やか

な柳の色を好む、淡い霞が烟って横たわり錦帶橋の南に在り。

102 秋山所見

秋山 しゅうざん

寂々寒山烟半遮

せきせき かんざん けむ なか さえ
寂々たり寒山 烟りの半ば遮ぎる

暮風吹動酒旗斜

ぼふう しゅき ななめ じよも
暮風 吹きて酒旗 斜に動す

夕陽留在楓林上

せきよう じよま ふうりん あ
夕陽 留りて楓林の上に在り

紅向黄昏更覺加

くれない こうこん おほ
紅は黄昏に向いて更に加える覚ゆ

語釈

しゅうざん 秋山しよけん 秋の山。所見しよけん 見る事柄。見込み、考え、意見。せきせき 寂々かんざん 寂しいさま。寒山かんざん 冬の山。寒々とした山。半ばなか 半分、中途。さえき 遮るはさ 遮断。塞ぐ。ぼふう 暮風しゅき 暮れの風。酒の旗はた 酒亭の旗。夕陽せきよう 夕日。留じよま 止まる、留まる。在りあ 有り。楓林ふうりん 楓の林。紅くれない 紅色。黄昏たそがれ 昏、夕暮れ。

釈文 寂しく寒々とした山烟り半ばを遮る、夕暮れの風が吹き酒亭の旗が斜めに動いている、夕陽が留まり楓の

林の上に在り。紅は黄昏に向かい更に加わるを覚える。

103 新涼

新涼 しんりょう

一枕微風曉夢回

一枕の微風 曉夢 回り
いっちゃん びふう ぎよむ めぐ

簾前木槿数枝開

簾前 木槿の数枝 開く
きぜん むくげ すうし

錦官城裡前宵雨

錦官城裡 前宵の雨
きんかんじょうり ぜんしやう

誘引新涼多少来

新涼を誘引して多少来る
しんりょう ゆういん たしやう

語釈

新涼 しんりょう 秋のはじめの涼しさ。一枕 いっちゃん 一眠り。微風 びふう 僅かな風。曉 あかつき 夜明け、払曉。回 めぐ 回らす。廻す。木槿 むくげ 木槿 葵科の落葉低木、花は

朝開いて夕方萎む。数枝 すうし 数本の枝。錦官城裡 きんかんじょうり 四川省の成都の別名、昔、その地の産物である錦を製造、管理する役所があったので云う、街の裡。宵前 しやうぜん

|| 宵の前。多少 たしやう 幾分、多かれ少なかれ、僅か。

通釈 一眠りして僅かな風曉の夢を巡らす、旗の前に木槿の数本の枝に花が開く、錦官城裡に宵の前の雨が、秋

の初めの涼しさを誘いながら多かれ少なかれ来る。

104 赴駄床途中所見二首

駄床に赴く途中の所見二首

行過溪路天晚矣

行きて溪路を過ぎればの天 晩んとす

半山斜照暮烟紫

半山の斜照 暮れて紫に烟る

山稍關処人家多

山稍 關く処 人家 多し

茅舎柴門齊晒紙

茅舎の柴門 齊く紙を晒す

己

溪口秋光己老矣

溪口の秋光 己に老たり

霜楓紅映暮山紫

霜楓 紅に暮山 紫に映ず

路上詩成無吟箋

路上 詩 成りて吟箋 無し

拾得落葉且代紙

拾い得るる落葉 且に紙に代える

釈文

駄床＝山口県岩国市の近郊。赴く＝行く。所見＝見る事柄。見込み、考え、意見。溪路＝谷の道。天＝空。烟＝煙。稍＝稍、少し。關

＝開らく、開ける。人家＝人の住む家。茅舎＝茅葺きの家。柴門＝柴や竹を組んだ門。齊く＝一斉に、皆同じに。晒す＝曝す、晒す。溪口＝谷の入り口。秋光＝秋の光。老る＝老ける。霜楓＝霜に遭った楓。紅＝紅色。映え＝映えて、映る。箋＝書箋、紙。吟ず＝吟じる。落葉＝落ち葉。

釈文

溪谷の路を行きて過ぎれば空は晩になろうとしている、山の半ばに斜めに照らす日も暮れて紫に烟る、山の稍開けた処は人家が多い、茅葺きの家柴の門に同じように紙を晒している。溪谷の入り口の秋の光も既に更けてきた、霜に遭い楓が紅に映えて暮れの山は紫に映える、路上で詩ができ吟じる紙箋もない、拾った落ち葉を將に紙に代える。

105 冬夜在洪前所見

(此日吾公自江門歸)

冬夜 とうや 洪前 じゅうぜん に在りての所見 しよけん

(此の日 吾公日江門自歸る)
わがこう じゅうもんより

明燈暗水客魂迷

明燈 めいとう 暗水 あんすい 客魂 かくこん 迷う

如墨寒雲壓谷低

寒雲 かんうん 墨 すみ の如く谷低 こくてい を壓す あつ

知得村人夜趁役

知り得たり村人 むらびと の夜の役 やく を趁う お を

数星火影上山溪

数星 すうせい の火影 かえい 山溪 さんけい を上る

語釈

冬夜 とうや 冬の夜。洪前 じゅうぜん 事物が捗らない前。在り あ 有り。所見 しよけん 見る事柄、見込み、考え、意見。吾公 わがこう 吾が君、吉川侯。江門 かうもん 江戸。自 より から、より。明燈 めいとう 明るい燈火。暗水 あんすい 暗い水。客魂 かくこん 魂。寒雲 かんうん 寒空の雲。墨 すみ 墨色、黒い。壓す あつ 押さえる、圧力。村人 むらびと 村の人。趁役 ちんやく 追いかける役、追い掛ける。数星 すうせい 幾つかの星。火影 かえい 火の影。山溪 さんけい 山の谷。

釈文 冬の夜洪前にあつての所見 この日我が公江戸より歸る。明るい明かりに暗い水客の魂迷う、寒空は

墨のようで谷を低く圧する、知り得たり村人夜の役を追いかけるを、幾つかの星の火影が山の谷を上る。

106 偶成

偶成ぐうせい

老菊凋林秋已闌

菊は老る林は凋しほみて秋 闌たけなわなり

茅簷雨霽滴声残

茅簷 雨 霽はれて滴てきせい声 残る

寒山落日紅楓好

寒山の落日 紅楓 好よし

掀起溪窓拄頬看

起きて溪窓を掀起けいそうて頬かかを拄ほほえて看みる

語釈

偶成ぐうせい 〓 ふと思いついて出来る、また、その作品。凋しほむ 〓 萎える、草木が萎れる、勢いが衰える。己すでに 〓 既に。闌たけなわ 〓 酣、真つ盛り。茅簷ぼうえん 〓

茅葺き軒。霽はれ 〓 晴れる、雨や雪が上がる。滴したたる 〓 水滴が落ちる。寒山かみざん 〓 冬の山、寒々とした山。落日らくじつ 〓 日が落ちる、夕暮れ。紅楓こうふう 〓 紅葉した楓。好こゝ

まし 〓 好ましい、佳い。掀起かか 〓 手で高くさしあげる。拄頬ちゆうきョウ 〓 頬杖をつく、頬を支える。溪けい 〓 谷。看みる 〓 見る」

釈文 菊は老い凋みて秋はまっ盛りである、茅葺きの軒に雨が霽はれて滴しずくの落ちる音が残る、寒々とした山の日暮

れの紅葉した楓が好ましい、起きて谷側の窓を掲げ頬杖をついて溪谷を看る。

107 冬夜

雲収無纖翳
寒月弄夜珠
窓梅得寒月
亦覺風景殊
吾有一壺酒
但恨無人俱
隣翁頗不俗
隔離且相呼
翁來共對酒
同成一宵娛
莫云夜深矣
明日也難圖

冬夜

雲 収り纖翳 無し
寒月に夜珠を弄す
窓梅 寒月を得る
亦た風景 殊なるを覺ゆ
吾に一壺の酒 有り
但だ恨む人 俱にする無し
隣翁 頗る俗せず
籬を隔て且つ相 呼ぶ
翁 来り共に酒に對す
同に一宵の娛を成し
云う莫夜深し矣
明日也図り難し

莫云酒竭矣

云う莫れ酒 竭ると

酒竭復可酤

酒 竭て 酤 復す可し

縦尽囊中物

縦うまに囊中物 尽きる

莫使梅月孤

使む莫れ梅月は孤なり

語釈

冬夜^{とうや} 冬の夜。雲収^{むす}り 晴れる。纖翳^{せんい} 翳り、僅かな曇り、覆う、翳す。寒月^{かづつ} 冬に寒々と輝く月。弄^{ろう}す 弄ぶ、欲しい儘にする、遊ぶ、

楽しむ。珠^{たま} 月。風景^{ふうけい} 風光。景色。一壺^{ひとつ} 一つの壺。恨^{うら}む 怨む、恨む。人俱^{ひと}に 人と共に。頗^{すこぶ}る 頻繁、頻りに。俗^{ぞく}な 俗、一般に。籬^り 生け垣。

翁^{おきな} 翁、老人。一宵^{いっしょう} 一晩。宵。娛^こ 娛樂、楽しむ。図^{はか}り難し 推し量り難い。莫^なない、暮れ。竭^{けつ} 背負い上げる、持ち上げる、尽くす、なくす、

尽きる。酤^こ酒 一酔い酒、一夜で醸した酒、一夜造りの酒、酒を売る、買う。囊中^{のうちゆう} 財布の中、懐中。縦^{じゆう}尽 放ち尽くす、出し尽くす。梅月^{ばいづつ} 梅に月、

美しいものの総称。孤^こ 孤独、独り。

語釈

雲は晴れて僅かな翳りもない、寒々とした月に夜珠を楽しむ、窓の梅寒々とした月を得て、また風景殊な

るを覚える、私には一壺の酒が在る、但し残念にも共にする人がいない、隣の翁頗る世俗でない、生け垣を隔てて

且つ互いに呼ぶ、翁が来て共に酒に対す、同一晩の娛を成す、云うでない酒が尽きると、明日はまた図り難い

と、酒尽きて一宵で醸した酒もまた飲もう、財布の中の物は出し尽くした、使むでない梅月は孤独である。

108 水楼夜飲

水楼夜飲む

水楼置酒到宵闌

水楼の置酒 宵に到りて 闌なり

無数芙蕖環画欄

無数の芙蕖を画欄に環す

今夜何須乗紅燭

今夜 何んぞ須からく紅燭に乗じて

倩他明日照花看

倩しき他 明日 花を照らすを看ん

語釈

水楼すいろう 水辺の二階家、酒亭。置酒ちしゆ 買った酒。宵よい 夕暮れ、夜。到りいた 至る、到る。闌たけなわ 酣、真つ盛り。無数むすう 沢山に。芙蕖ふきよ 蓮の花、

芙蓉、美人の形容。画欄かくらん 欄干、手すりで隔て区画する。環めぐ し 廻らす、巡らす。紅くれない 紅色。燭しよく 燭台、蠟燭。倩せい 美しい、色つやが良い土の美称、

美しい、つらつら。照るて 照る、輝く。看み 見る。

釈文 水辺の酒亭に買った酒夜になりまっ盛りである、数限りない蓮の花手摺りで囲い巡らす、今夜どうして暫

し紅燭を乗せる、美しきほか明日は花を照らすを看る。

109 秋夜即事

しゅうやそくじ
秋夜即事

涼風颯至竹床頭

りょうふう さつ ちくしょう とうへ
涼風 颯と竹床の頭に至る

日入暑塵全已収

にゅうりて しょじん すべて おさま
日入りて暑塵 全て己に収る

一種吟虫草露底

いっしゆ ぎんちゅう そうろう ぞう
一種 吟虫 草露の底

今宵始送数声秋

こんしやう とうせう
今宵 始て送る数声の秋を

語釈

秋夜しゅうや|| 秋の夜。即事そくじ|| 事に就くその場での出来事、その場の事を詠じた詩、また、江村即時などと詩の題名に用いる。涼風りょうふう|| 涼風。颯さつ||

はやて、疾風、風がさつと吹くさま、ものの盛んなさま、清らかなさま。竹床ちくしょう|| 竹の床。暑塵しょじん|| 煩わしい暑さ。己すで|| 既に。収るおさま|| 修まる、納まる、

終わる。一種いっしゆ|| 一つの種類。吟虫ぎんちゅう|| 鳴く虫。草露そうろう|| 草の露。今宵こんしやう|| 今夕、今晚。数声すうせう|| 幾つかの声。

釈文 涼風がさつと吹いて竹床の頭に至る、日が暮れて暑い煩わしさ全て既に収まる、一種鳴く虫草露の底で、

今宵初めて送る秋の数声を。

110 秋夜訪午谷翁分韻得分字

秋夜^{しゅうや} 午谷翁^{ごこくおう}を訪^{たずね}て分韻^{ぶんいん} 分字^{ぶんじ}を得る

溪上秋晴絶点雲

溪上^{けいじょう}の秋晴^{しゅうせい} 絶^{ぜつ}して雲^{てん}を点^{てん}ず

幽庭草露虫声聞

幽庭^{ゆうてい}の草露^{そうろ} 虫声^{ちゅうせい}を聞^きく

一床朗月涼無価

一床^{いつしょう}の朗月^{ろうげつ} 涼^{りよう} 価^{あた}無し

吟座何妨過夜分

座^ざに吟^{ぎん}じて何^なんぞ妨^{さまた}げん夜分^{やぶん}を過^{すぎ}るを

語釈

秋夜^{しゅうや} 秋の夜。午谷翁^{ごこくおう} 香川午谷、五竹の詩の師。訪^{たずね}る 訪れる、尋ねる。分韻^{ぶんいん} 韻を分ける。分字^{ぶんじ} 字を分ける。溪上^{けいじょう} 谷の上。点雲^{てんうん}

点^{てん}のような雲。絶^たつ 絶える、無くなる、晴れる。幽庭^{ゆうてい} 幽かでひっそりとした庭。草露^{そうろ} 草の露。一床^{いつしょう} 一眠り。朗月^{ろうげつ} 朗月 明るく曇りのない月。涼^{りよう}

涼氣^{りょうき} 価^{あた} 価値。座^ざ 座し。座り。吟^{ぎん} 吟ず、詠う、吟じる。何妨^{なにごまたげ} 何を邪魔する。夜分^{やぶん} 夜中、夜半、夜遅く、晩。

釈文 溪谷上の秋晴れが絶えて雲が点在する、幽かで寂しい庭の草露で虫の声を聞く、一眠りしたら明るく曇

のない月に涼気も価値がない、坐に吟じてどうして妨げようか夜分過ぎるを。

111 水亭即日

すいていそくじつ
水亭即日

秋入水亭風氣涼

すいてい 秋には水亭 入りて風氣 涼し

晚来避暑且操觴

よる 晩 来りて暑を避け 且く 觴を操る

吟眸斜送帰鴉影

ぎんぼう 吟眸 斜に帰鴉の影を送る

一角青山帶夕陽

いっかく 一角の青山 夕陽を帶る

語釈

水亭すいてい 水辺の酒亭。即日そくじつ その日。風氣ふうき 風の気。晩来ばんきた 晩が来て、夜になり。避暑ひしょ 暑さを避けて。且か つまた、まして。觴さかすき 盃。

杯あわづ 操る

手繰る、操る。吟ぎん ず、詠う、吟じる。一角いっかく 一方。青山せいざん 青々と草木の茂っている山、男子は何処の青山でも骨を埋めることが出来る、

必ずしも故郷でなくとも良いということ。夕陽せきやう 夕陽、夕日。

釈文 秋に入り水辺の酒亭の風の気が涼しい、夜が来て暑さを避けて暫く觴さかすきを操る、吟じる眸を斜めに送ると

帰る鴉の影が、一角の青山に夕陽が帯びるを。

112
題画

画に題す

翠楊翠柳蔭汀州

翠楊 翠柳 汀州を蔭う

携得一瓢江上遊

携え得たり一瓢 江上の遊に

蓬底無端醉眼去

蓬底 端 無く醉眼去る

舟丁盪夢夕陽流

舟丁 盪夢 夕陽 流る

語釈

題画 画に題をつける。翠楊 翠の楊。翠柳 翠の柳。汀州 汀の州。蔭う 蔭、覆う。携え 携行、持つて。一瓢 一つの瓢、瓢箪

で作った酒や水を入れる器。水筒。江上 川の上。遊 遊ぶ、行く。蓬底 船底に蓬を葺いた船室。端 端。端 端。醉眼 酒に酔った眼。舟丁 船頭。

盪夢 夢を欲しいままにする、夢のうちに動かす。夕陽 夕陽。夕日。

釈文 翠楊に翠柳 汀州を蔭う、携えて来た一瓢を水上で遊ぶに、蓬で葺いた舟小屋の底で端なくも酔いが醒め

る、船頭夢の裡に動かし夕陽が流れる。

113 暮秋

暮秋 ぼしゅう

晚窓枯坐静如禪

晩窓 ばんそう 枯れ坐る かすわ 静なる しずか こと禪 ぜん の如し

一炷沈檀一縷煙

一炷 いつしゆ の沈檀 ちんだん に一縷 いちる の煙 けむり

秋老前山紅葉好

秋老 おい て前山 ぜんざん 紅葉 こうよう 好 よ し

紅霞襯得更嬋娟

紅霞 こうか 襯 しん を得て更 せんえん に嬋娟 せんえん たり

語釈

暮秋 ぼしゅう 〓 秋の終わり、晩秋。晩窓 ばんそう 〓 夜の窓。禪 ぜん 〓 禪、座禪。一炷 いつしゆ 〓 一つの灯火、明かり、灯心、灯油に浸して明かりを灯すもの。沈檀 ちんだん 〓 沈香

と檀木、共に香木。一縷 いちる 〓 一筋、一條。老 おい 〓 老いて、老ける。紅霞 こうか 〓 霞が紅色に。襯 しん 〓 はだき、近づく、くつつき合う、親、助ける。嬋娟 せんえん 〓 姿態が

美しい、艶やかで美しい、上品で美しい。

釈文 夜の窓は秋枯れて座る静かなこと禪のようである、一つの灯り沈香と檀木の一條の煙り、紅に霞が近ずき

助け合い更に艶やかで美しい。

114 重陽

重陽 ちようよう

昨夜雨敲三逕寒

昨夜 さくや 雨は三逕 さんけい を敲 たた いて寒く

曉来先繞竹籬看

曉来 ぎょらい 先 ちくり ず竹籬 めぐ を繞 めぐ りて看 み

数朶黄花無恙在

数朶 すうだ の黄花 こうか 恙 つつが 無 あ く在 あ りや

秋香冉冉露溥々

秋香 しゅうこう 冉冉 ぜんぜん 露 あらわ す溥 はくぼく 々たり

語釈

重陽 ちようよう 天、陰曆九月九日、この日、高い丘などに登り、かわはじかみの実を頭に夾むと邪氣を払うとされた、九は陽の数で九が重なるか

ら重陽ちう、重九。敲 たた く叩 たた く。三逕 さんけい 三條の小道、細道、山道。曉 あかつき 弘曉 夜明け。竹籬 ちくり 竹を組んだ垣根。繞 めぐ す廻 めぐ す、巡 めぐ らす。看 み る見 み る。数朶 すうだ

数本の枝。黄花 こうか 黄色の花、黄菊。恙 つつが なく無 な 事、病氣しない。在 あ り有 あ り。冉冉 ぜんぜん だんだん進行する、しなやかなさま。露 あられ す表 あらわ す、現 あらわ す。溥々 はくぼく

敷き広げる、遍く行き渡る、廣い、大きい。

釈文 昨夜雨は山道を敲いて寒く、夜明けが来て先ず竹を組んだ生け垣を巡って看る、数本の枝の黄色の花は無

事で有ったろうか、秋の香りはだんだんと進み露わし隈無く行き渡る。

115 小春散歩

小春の散歩

欲喧可愛小春光

喧かならんと欲す愛す可し小春の光

閑歩適過野寺傍

閑歩に適い野寺の傍を過る

忽見櫻花出櫓上

忽ち見る櫻花櫓上に出る

駐筇一賞立斜陽

筇を駐めて一賞斜陽に立つ

語釈

小春しゅん 陰曆十月小春こはる、この時期は、春に似て聞こうが温和で、花の咲くこともあるのでいう。散歩さんぽ ぶらぶらと歩く。喧やかまし 喧噪、喧

しい。可愛かわい 可愛い。閑歩かんぽ のんびりと歩く。適かな 適う、出来る。過や 行く、尋ねる。野寺のでら 野中の寺。傍かたわら 側。脇。櫻花おうか 櫻の花。櫓上しやうじやう 帆

柱の上。筇きよう 杖に適した南方の竹、杖。駐とど 留め、止め。一賞いっしょう 褒める。斜陽しややう 夕日、夕陽。

釈文 暖かくなろうとしている陰曆の十月の光、長閑に歩きながら野寺の傍らを過ぎる、ふと見上げると櫻花在

櫓ぼしの上にしち出る、筇つえをと留めて一賞し夕陽に立つ。

少小学儒欲有為
初心何識計元痴
七尺微軀無地着
寒窓中夜泣交頤
卅才空傳識字名
弊衣露肘一狂生
欲隨世上揚波去
泉下何顏對屈平
欲向山中臥白雲
也知鳥獸同群
和光塵土聊終歲
不學劍兮不學文

少しょう小しょうにして儒じゆを學まなび有あ無むを為なさんと欲ほし
初しよ心しん 何なんぞ識しらん計はかるくらい元もと々もと 癡ちなるを
七尺びくの微軀 地ちに着きく無なし
寒窓かんそうの中夜 交頤かうぎに泣なく
卅才さんじっさい 空くうに傳つたわわ 識しる字じの名な
弊衣へいゐに肘ひじを露いす一狂生いちきやうせい
世せ上じやうに随したがい欲ようす揚波去ようはる
泉下せんかに何なんの顔かほして屈平くつへいに對たいす
山さん中ちゆうに向むかわん欲ほす白雲はくうんに臥がさんと
也また知ちる鳥獸ちやうじゆうと同ともに群むれするをかたし
和光わこうの塵土じんど 聊いささかか歳としを終おるを
劍けんを學まなばず文ぶんを學まなばず

城東昨日贖書還

城東 昨日書を贖いて還る

中有丹經自氏傳

中に丹經有る氏より傳う

儂身知有神仙分

儂の身を知り神仙有りて分つ

買得長生五百錢

買い得る五百錢を長しえに生かす

予一日閱市得白

予は一日市を閱す

玉蟾集直僅五百

白玉蟾集 直に得る僅か五百

文中有鍊丹秘訣

文中に鍊丹の秘訣有り

語釈

書懷^{しよかい}を思うところを書く。儒^{じゆ}儒者^{じゆしや}、学者^{がくしや}。小少^{せうせう}幼少^{じゆうせう}。初心^{しんしん}最初に決心し。識^しり知^ちる。計^{はか}る図^ずる、測^{もど}る。元^{もと}元々^{げんげん}、元來^{げんらい}。癡^ち

痴呆^{ちたい}、馬鹿^{ばか}。識^しる知^ちる。字^{あざ}養^{やう}う、世^よに一人前^{いちぜん}の人馬鹿^{ばか}。微軀^{びく}小さな体。寒窓^{かんそう}寒々とした窓。交頤^{こうい}おとがい、顎^{あご}をしやくる、顎^{あご}で指図^{しず}する。

卅才^{さんさい}三十才。傳^{つた}り伝^{でん}たこわとして交^{まじ}わるときの名^な。名^な名乗^{なをのり}る、名^なずける、名前^{なまえ}。弊衣^{へいい}草臥^{そうふい}れた衣服^{いふく}。肘^{ひじ}肘^{ひじ}、肱^{ひじ}。一狂生^{いつきやうせい}一人の狂^{きやう}つた人。

世上^{せじやう}世の中。随^{したが}い従^{したが}う、遵^{したが}う、随^{したが}う。揚波^{ようは}上げ潮。打^うち上^あげる波。泉下^{せんか}地下^{ちか}のあの世、死後^{しご}に行くところをいう、黄泉^{くわい}。屈平^{くつへい}屈原^{くつげん}、屈平^{くつへい}、

戦国時代^{せんごくじだい}の楚^しの人、楚王^{しやうわう}の一族、名^なは平、字^{あざ}は原号^{げんごう}は靈均^{れいこん}、懷王^{わいわう}のとき、三閭^{さんか}の大夫^{たいふ}となったが、人の嫉^{しやう}みを受けて追放^{しゆほう}され、離騷^{りさう}を作り志^しを示した、

のちに、襄王^{せうわう}のとき再び追われ汨羅^{みらく}に身を投げ自殺^{じそく}した、楚辭^{しよじ}、の代表的作家^{たいていてきけいさ}として有名^{ゆうめい}。山中^{さんしやう}山の中。臥^がす横臥^{わうふ}、寝^ねる、伏^ふせる。白雲^{はくうん}白^{はく}い雲^{うん}。

鳥獸^{ちようじふ}鳥^{ちよう}や獸^{じふ}。堅^{かた}い、難^{がた}しい、出来^{でき}ない、頗^{さか}る、遂^{つい}に、そこで、そのま^ま。同^{どう}じ群^{ぐん}同類^{どうるい}、同^{どう}じ群^{ぐん}。和光塵土^{わくわうじんど}知^ち恵^ゑの光^{くわう}を和^わらげ隠^{かく}して、俗世間^{じやくせけん}

の中に交^{まじ}わっていること、仏^{ぶつ}が衆生^{しゆじやう}を救^{きう}うために、その本地^{ぼんぢ}の知^ち恵^ゑの光^{くわう}をかくして人間界^{にやうけん}の姿^{すがた}を変^かえて現^{あらわ}れること悪人^{あくにん}と一緒^{いっしょ}にいても、その喑^{くわい}に染^{せん}まら

ないことをいう。聊か耳が鳴る、耳鳴り、頼る、頼み願う、楽しむ、少し、僅か、少々。歳年。劔刀。兮語調を整える助字に用いる、韻文の句末、または中間にあつて余情をそえる。文文章、あや。城東城の東。贖物と交換する、取り替える、金品を出して罪を免れる、償う、質を受け出す。還返す。丹経丹薬の書物、不思議な効力のある薬、仙薬、靈薬の本。自から、より。儂我吾。神仙仙人。分分際。五百錢五百文の錢。市出店。閱見る、観る、閱覧。白玉蟾集月の別名、月の文集。白玉月の別名。蟾ひき蛙、月の別名。直に即時。僅長僅かに長い、僅かに多い。五百文五百文の錢。鍊丹丸薬を鍊る。秘訣奥の手、秘密の優れた方法。

通釈 幼少にして儒を學び何か立派な事を行いたいと思う、初心どうして知る計るくらい元々の阿呆なのに、七

尺の小さな体が地に着くこともない、寒々とした窓辺で夜中に顎をしゃくり泣く、世才空に傳り知る字の名、草

臥れた衣服に肘を露出する一人の狂った人、世の中に随おうとするが揚波は去る、あの世にどのような顔をして屈平

に対す、山中に向かおうとする白雲に横臥しようと、また知る鳥獸同じ群れをするのは難しい、知恵の光を和らげ

隠して俗世間と交わるは少し歳を終わる、剣を学ばず文を学ばず、城東で昨日書を買って還る、中に仙薬を練丹

の術が有るを氏より傳う、買って得た五百錢を永久に生かす、私は一日市を見て歩く白玉蟾集直ちに得る僅か五百

文に練丹の秘訣がある。

117 乙卯秋予得一梧桐大二圀

製一琴係以詩五首録二

乙卯おつうの秋予いつうは一梧桐いっく 大さ一圀いっくを得たり手てせい製いっきんの一琴詩五首を以て係り録二

擇得良材陽与陰

えら 擇りようざいび得たり良材 陽ようと陰いん

製琴且摹重公琴

こと 琴つくを製りて且ぼつ摹じゅうこうす重公の琴こと

箇是分明仲尼様

こ 箇ぶんめいれはれ分明あり仲尼様ちゅうじ

鏗然能発太雅音

こうぜん 鏗然よ 能く太雅音たいが おんを發す

嚴島神社祠有一古傳是重衡琴

いつくしまじんじや 嚴島神社の祠ほころに一つ古くから傳う是れ重衡しげひらの琴有り

為是防辺重武夫

ぼうへん 是れ防辺の重武夫じゅうもの のふに為す

半錢不直一寒儒

はんせん 半錢あた 直いっかんらず一寒の儒じゆ

杏壇遺韻無人和

きやうだん 杏壇の遺韻いじんに人 和わする無し

枉被世人呼做迂

ま 枉せじんげてさせられて世人 呼うんで迂なを做す

語釈

乙卯おつう＝安政二年、一八五五。梧桐いつく＝青桐、琴や家具の材料になる。一圀いっく＝一圀い、一抱え。手製てせい＝選手製、自分で作る。一琴いっく＝一つの琴。

良材りようざい 良よい材料。擇たくし 選えんび、扱よう。陽よう 日にち。与と 共にに。陰いん 日にち陰いん。製せいす 製せい作さく、作さくる。摹ぼす 模も写が、写がす、似にせる。重じゅう公こう 平へい重じゅう衡けい。箇こ 是ぜ。仲ちゅう尼に 孔子こうしの字じ。鏗こう然ぜん 琴しんの音おん、鐘かねの音おんのさま。能よく 良よい、能よく。太たい雅が 太たい古この雅が。音おん 琴しんの音おん。重しゅう衡けい 平へい重じゅう衡けい。一いち古こ琴しん 一いちつの古こい琴しん。嚴いん島しやう神しん社しゃ 廣くわう島しやう縣けん宮みやう島しやうに在ある神しん社しゃ、平へい清しやう盛せいの創そう建けん。防ぼう辺へん 海かい防ぼう、辺へんりを防ぼう備び。祠ほくら 神しん社しゃ。重しゅう 重じゅう衡けい。武ぶ夫ふ 武ぶ人にん。半はん錢せん 五ご厘りん。一いち寒かん儒じゆ 一いち人にんの貧ひんしい儒じゆ者しや。杏きやう壇だん 學がく舍しや 孔こう子しが學がく問もんを教きやうえた所しよ。遺い韻いん 後ご世せいに遺いされた詩し賦ふ。和わむ 和わらぐ、中ちゅう和わ、平へい和わ。枉わう 木きが曲まがる、曲まがける。被こる 被こさせられる。世せい人にん 世せい間かんの人にん。倣さく迂う 曲まがり作さくる。倣さく 作さくる、為なす、著しやく作さく、行かうう。迂う 曲まがる、くねくね曲まがる、避さくける、遠えん回かいり、鈍どんい、稍しやう、少せう

語ご釈しやく 安あん政せい二に年ねん 一いち八はち五ご 私わがは一いち本ぽんの梧わ桐どう大だいきさ一いち圀くわんいを得えた、手て製せいの琴しんを作さくる、それに係かわる詩し五ご首しゆ録ろく二に選せんび得えた良よ材ざい陽ようと陰いん、琴しんを製せい作さくし且かつつ是ぜ此この分ぶん明めいあり孔こう子し様やう、琴しんの音おん能よく太たい鼓この雅がの音おんを出です、嚴いん島しやう神しん社しゃの祠ほくらに一いちつ古こくから傳でんわる是ぜれ重じゅう衡けいの琴しんあり、是ぜれ辺へんり防ぼう備びの武ぶ夫ふ重じゅう衡けいである、半はん錢せん直ちくらず一いち人にんの貧ひんしい儒じゆ者しやよ、孔こう子しが學がく問もんを教きやうえた所しよ後ご世せいに遺いされた詩し賦ふに人にん和わするなし、曲まがげさせられて世せいの人にん呼よんで避さくけて作さくる。

118 水村晚眺四首

水村晚眺四首
すいそんばんちょう

江亭晚望好

江亭の晚望 好し
こうてい ばんぼう よ

烟罩水边村

烟るは罩を水边の村
けむ とう すいへん

西嶺斜陽色

西嶺 斜陽の色
せいりょう しゃよう

東山孤月痕

東山 孤月の痕
こうざん こげつ あと

枯荻已堪燒

枯荻る己に燒くに堪え
こてき すで た

寒潭又不渾

寒潭 又 渾らず
かんたん にじ

試煎一鼎苦

試に煎ず一鼎 苦し
ためし せん いってい にが

数椀洗心煩

数椀 心煩を洗う
すうわん しんはん

霜林黄葉美

霜林 黄葉 美しく
そうりん こうよう

村外夕陽村

村外 夕陽の村
せきやう

蘆際垂竿影

蘆際に垂竿の影
ろさい しいかん かげ

水涯横舟痕

水涯 舟痕 横たう
すいがい せんこん よこ

秋風久蕭殺

秋風久しくに蕭殺す
しゅうせいひさ しゅうさつ

冬意己胚渾

冬意 己に胚渾す
とうい すで はいこん

莫及江湖楽

江湖の楽しみに及ぶ莫れ
こうこ たの なか

終無世俗煩

終いに世俗の煩わしさ無し
つ せぞく わずら

罟師盪槳去

罟師 槳を盪て去る
こし かい あらつ さ

驚鷺向前村

驚を驚かして前村に向う
さき おぢろ ぜんそん

黄葉有霜信

黄葉 霜信 有り
こうよう そうしん

白沙見水痕

白沙に水痕を見る
はくさ すいあと

低頭山倒影

頭を低れ山の倒影
こうべ た どうえい

濯足水生渾

足を濯ぐ水渾を生ず
すす すいこん

此際多閑況

此の際にや閑況 多し
きわ かんきょう

吟筇日々煩

吟筇 日々に煩たり
ぎんきょう ひび はん

語釈

水村すいそん 水辺の村、川辺の村。 晩眺ばんちよう 晩に眺める、夜眺める。 江亭かうてい 川辺の酒亭。 烟けむ 煙る。 罩とう 籠、魚を捕らえるための竹製の籠、罎たんめる、罎たんに入れる。 水辺すいへん 川辺、水辺。 嶺みね 山や嶺。 斜陽しゃやう 夕陽、夕日。 孤月こげつ 月。 痕あと 跡、痕。 荻おぎ 荻、稲科の多年生草本、蘆に似た草。 己すで 既に。 潭たん 淵、水が深く淀んでいる所。 渾こん 水が盛んに湧き出るさま、また、その音、濁る、全て。 煎せん 煎ず、煎じる、煮る。 一鼎いつてい 一つの釜、大鍋。 数椀すうわん 椀に何杯か。 煩心はんしん 煩わしい心。 霜林そうりん 霜の降った林。 黄葉かうよう 葉が黄色になった。 夕陽せきやう 夕日。 蘆あし 芦。 際はて 際に、側、側に。 水の涯はて 水平線、水の果てる所。 痕あと 痕跡。 秋風しゅうふう 秋の風。 蕭しょう 蓬、河原蓬、ひっそりと物寂しい、風や落ち葉などの物寂しい音。 殺ころ 殺す、殺す、枯らす。 久しひさ 久しい、長い間。 冬意とうい 冬の気配、訪れ。 己すで 既に。 既すで 既に。 胚渾はいこん まだ形も為さず見分けがつかない状態。 江湖かうこ 大きな川や湖。 樂らく 娛樂、樂しみ。 莫なかれ 無い、暮れ。 世俗せぞく 俗世間。 煩はん 煩雑、煩わしい。 罟師こし 漁師。 槩しやう 權、舵、短い櫓、舟を漕ぐ道具。 盪とう 洗う、洗い濯ぐ、動かす、揺れ動く。 去さ 行く、帰る。 鷺さぎ 鷺、水鳥。 黄葉かうよう 黄色の葉。 濯すす 濯ぐ、濯ぎ洗い。 閑かん 閑ま、長閑に。 況いはん 況や、状況、況や、まして、ますます、たとえ。

釈文

川の辺の酒亭ど夜眺めるのは好ましい、魚を捕る網も畑けむって見える水辺の村、西の山は夕陽の色が斜めに、東の山に孤月の痕が、荻は既に枯れて野焼きを待つ、寒く冷たい淵また濁らず、試しに煎じた一つの釜が苦い、数椀飲むと心の煩悶を忘れる。霜が降りた林の紅葉が美しい、村外夕陽の村、蘆の際に垂れる竿の影、水の果てに舟の痕が横たう、秋風久しく物寂しい、冬の気配既に静かに訪れる、余生の娛たのしみに及ばない、終いに世俗の煩わしさはない。漁師かい槩かいを動かして去る、鷺を驚かして前の村に向かう、黄葉に霜の便り有り、白い沙に水の痕が見える、頭を低れて山の倒影、足を濯ぐ水濁りを生ずる、此の際にまして閑が多い、箒つえをつき吟じるも日々に煩わしい。

119 病起訪午谷山人

やまいおこ ごとくさんじん たずね
病起り午谷山人を訪る

病起獨過午谷翁

やまいおこ ひと すい へん へ おう
病起りて獨り過す午谷の翁

心驚烏兔去匆々

うと そうそう
心は烏兔 匆々に去るを驚く

如昨様棠花畔飲

さくよう どうか ほとり
昨様の如く棠花の畔で飲む

己無韉々動薰風

すで い い くんふう
己に韉々 無く薰風を動かす

語釈

午谷山人ごこくさんじん 香川午谷 五竹の詩の師。訪るたずね 訪れる、尋ねる。病起りやまいおこ 病氣に罹り。獨りひと 一人。午谷翁ごこくおう 香川午谷。烏兔うと 日と月の

別名、太陽の中に三本足の烏が棲み、月の中に兎がいるとの伝説による、金烏玉兔、転じて月日、歲月。匆々そうそう 慌ただしいさま、忙しい。昨様さくよう 昨年、昨日のように。棠花どうか 海棠の花。畔ほとり 河畔、辺。己すで に 既に。韉々い い 花の盛んなさま、また、光明のあるさま。薰風くんふう 穏やかな初夏の風、青葉を吹いて来る風、南風、南薫。

釈文

病氣になって獨りで過へんす午谷の翁、心は月の慌ただしく去るのを驚く、昨年のように海棠の花の畔ほとりで飲

む、既に花の盛んなさまは無く穏やかな初夏の風が吹いて来る。

120 池上即事

ちじょうそくじ
池上即事

獨出柴扉立夕暉

さごひ
獨り柴扉を出で夕暉に立てば

掩庭新樹緑相依

おお しんじゆ
庭を掩う新樹 緑 相依る

金魚鳩首知何快

きんぎょ きゆうしゆ
金魚の鳩首 何んぞ快なるを知る

一笺清泉池上飛

せいせん いっけん
清泉を一笺すれば池上に飛ぶ

語釈

ちじょう
池上||池の上。即事||その場での出来事、目の前の景色やようす、その場での事を詠じた詩。柴扉||柴や竹を組んで作った扉。夕暉||夕日輝

く、夕日の光。掩う||覆う、掩。新樹||新緑、若葉。相依る||互いに寄り合う。金魚||觀賞魚。鳩首||首を集める、額を集めて相談する。快||快い。

||一笺||一つの笺、竹を渡して泉水を流す。清泉||清い泉。

釈文 独り柴を組んだ扉を出て輝く夕べにに立てば、庭を掩う樹木の新緑が寄り合う、金魚が額を集めて何の相

談か快さを知る、清い泉から笺で引く水が池上に飛ぶ。

121 秋日偶成

しゅうじつぐうせい
秋日偶成

簾外芙蓉花正嬌

れんがい ふよう
簾外の芙蓉の花正に嬌なり

朝々方覺老炎消

ちようちよう まさ おぼえ えんしょう お
朝々 方に覺る炎消の老ゆを

一輪紅日纔西昃

いちりん こうじつ わずか かたむ
一輪の紅日お纔に西に昃く

便有涼颼度竹梢

すなわ りようし ちくしょう わた
便ち涼颼 有りて竹梢を渡る

語釈

秋日しゅうじつ 秋の日。偶成ぐせい ふうと思いついて出来た詩。簾外れんがい 簾、竹で編んだ帳、御簾の外。芙蓉ふよう 蓮の花、美人の形容。正にただ 当に、將にきよう 嬌

しなやか、艶めかしい、艶やかで美しい。朝々ちようちよう 毎朝。老を覺るおい おぼえ 老いたことを自覺する、老いを感じる。炎消えんしょう 炎の消えるを。一輪いちりん 一つの

輪。紅日こうじつ 太陽。纔せいか 僅かに、少し。昃しやく 傾く、日が西に傾く。涼颼りようし 涼風、涼しい風。竹梢ちくしょう 竹の梢。渡るわた 渡る、通る。

通釈

すだれ 簾の外の蓮の花正に艶やかで美しい、毎朝方に覺え炎の衰えるを、一輪の夕陽が僅かに西に傾く、則ち涼

しい風があり竹の梢を度わたってくる。

122 予一日過錦里之野黃菊盛開

冷淡可愛乃以一詩

予は一日錦里の野に過すきんり黄菊盛開こうきくせいかいにして

れいたんかわいいだい冷淡可愛乃以一詩

城中貴人圃

じょうちゆう きじん はたけ城中 貴人の圃

養菊苦呵護

菊を養いかこ呵護に苦しむ

糞之又灌之

ふん糞 又た之れにそそ灌ぐ

且暮去復顧

且つ暮れ去りて復たま顧みる

秋風花開時

しゅうふう秋風 花 開く時

置酒事歡娛

ちしゆ置酒 歡娛を事とす

朱憫擁花前

しゆびん朱憫 花前に擁す

紅氈列酒具

こうせん紅氈 酒具を列す

風景非不華

ふうけい風景 華ならざるをそし非る

終乏冷淡趣

つい終に冷淡の趣に乏し

瞻彼野外菊

彼をすく瞻う野外の菊

幽花自然吐

幽花 自然に吐く

冷々傲風霜

冷々 風霜に傲り

淡々帶雨露

淡々と雨露を帶る

真是隱逸姿

真に是れ隱逸の姿

可愛而可慕

愛す可し慕う可し

語釈

錦里 錦川の畔の里。黄菊 黄色菊。盛開 満開。闌 冷淡 清らかで淡い。城中 城の中、市内。貴人 貴い人。圃 畑。苦 苦む、苦い。呵 叱る、責める、笑う、咎める。呵護 咎める守る。糞 糞。肥料 灌 灌漑、水遣り。復た 再び、返す、復し。顧 反省。歡 喜び、悦び、慶び。娛 娯楽、楽しみ。朱 赤い。憫 憐憫。擁 擁す 抱擁、抱く。紅氍 紅色の毛氍毹敷物。酒の具 酒の肴、おかず。列 並ぶ、列ぶ。風景 風光、景色。華 花。冷淡 清らかで淡い。趣 さま、促す、意味、旨、行く。贈 贈す 足す、金品を与えて不足を補う、救う、助ける、にぎわす、恵む足りる、豊かである。野外 屋外。幽 幽かな、閑静な。自然 ありのまま。吐く 吐き出す、咲く。開く。冷々 清々しい、冷たいさま。傲 遊ぶ、楽しむ、傲る、侮る。淡々 あつさりとしている。真に 誠に、信に、実に。隱逸 世を避けて隠れる。慕う 慕う、思い焦がれる、忘れない、愛おしむ。可し 〓。良い、佳い

釈文

私は一日錦川の辺の野で過ごす黄色の菊が満開で清らかで淡く愛すべしを乃を以て一詩。城中 貴人の圃、菊を養い攻め護るに苦しむ、肥料また水を灌ぐ、且つ夕暮れに去りまた顧みる、秋の風が吹き花が開く時、

買つて置いた酒で飲よりこび娛たのしむを事とする、紅く憫あわれにも花の前で抱いだく、紅い敷物の上に酒の肴さかなを列べる、風景は華
でないのを誹そしる、終に清らかで淡い趣に乏しい、彼を救う野外の菊、幽かな花が自然に吐ひらく、清々しく風や霜に樂
しむ、あっさりとして雨の露を帯びる、實に是が世を避けて隠れる姿である、愛すべしして慕うとよい。

123
初冬

初冬しやとう

溪村蕭然暮風悲

溪村けいそん 蕭然しやうぜんとして暮風ぼふう 悲し

黄菊花残楓葉衰

黄菊かうきく 花 残り楓葉ふうよう 衰おとろえる

獨立黄昏数歸鳥

獨り立つ黄昏こうこんに数歸すうきの鳥

月輪己印古梅枝

月輪げつりん 己すでに印しるす古梅こばいの枝

語釈

初冬しやとう 冬の始め。溪村けいそん 溪谷の村。蕭然しやうぜん 物寂しいさま。暮風ぼふう 暮れの風。黄菊かうきく 黄色の菊。楓ふう 楓。衰かえでる 衰弱、萎える。黄昏かうこん 黄昏。

夕方。月輪げつりん 月。己すでに 既に。印しるす 記す。古梅こばい 古木の梅。

釈文 溪谷の村物寂しく暮れの風も悲しい、黄色の菊の花に楓の葉が枯れ衰える、独り立つ黄昏に数羽の鳥が、

月は既に古い梅の木の枝に。

124 讀左傳

吾有杜預僻
對卷寢食忘
盲史麟經翼
左丘史之良
悠々千載後
誰說梁与羊
始知序一事
其妙在文章
先王礼樂化
洵爛如春芳
物子豈欺我
浮忝庸詎傷

左傳を讀む

吾に杜預の僻有りて
卷に對し寢食忘る
史に盲く麟經を翼すを
左丘史之れ良し
悠々千載の後
誰説く梁と羊を
始て知る序の一事
其の妙文章に在り
先王礼樂と化す
洵爛と春芳の如し
物子 豈 我を欺むかん
浮れは庸詎 傷むに忝けなし

語釈

左傳さでん||春秋左氏傳の略。杜預とよ||晋の名將、學者、字は元凱、春秋左氏傳の注釈を作った。僻へき||癖、僻み、片田舎、辺鄙。卷かん||書物。寢食||寝ると食べる。史しに盲く||古今の記録や書や歴史に疎い。麟經||春秋の別名、孔子の書||翼よくす||助ける、補佐。左丘史||孔子と同時代の人で、春秋左氏傳の著者といわれる。悠々||憂えるさま、遠く遙かなさま、のんびりしたさま。千載||千年。||梁山伯か。与||共に。羊||羊、古代山の神とされた。序||順序を追って述べる。一事||一つの事、事柄。妙||珍しく不思議な。先王||先の王。礼楽||礼と樂。洵爛||織物の彩があつて美しい、目映いばかりにきやびらかで美しい。春芳||春の香りのよい草、芳草。豈||どうして、なんと。欺く||欺瞞、騙す。浮庸||働くことは。忝く||有り難く。詎なん||詎、なんぞ、あに、いずくんぞ、とどめる、至る。傷まん||痛くない、苦しくない、厭わない。

釈文

私には春秋左氏傳に僻ひがみが有る、書物に対して寢食を忘れる、古今の記録や書に疎く孔子の書麟經を翼たすける、左丘史の春秋秋左氏傳是良し、遠く遙かに千年の後、誰が説く梁と羊を、始めて知る順序を追って述べる一事を、その珍しく不思議さは文章に有り、先の王礼と樂と化す、目映いばかりにきやびらかで美しさは春の香りの良い草のようである、物子どうして私を欺くのか、熱中することはいずくんぞ恐れ入り勿体ないことである。

125 釈尊

釈尊 しゃくそん

百結伽薩君可憐

百結伽薩君 憐む可し ひやくけつ きやざ せいきん やさ

休將貧賤易聖賢

貧賤に休は將に聖賢に易し ひんせん いこう せいきん やさ

請看乞鉢趺跏後

乞い請け看る鉢趺跏の後 こ う み てつか

說出大藏經八千

説き出す大藏經 八千 だいぞう きよう はっせん

語釈

釈尊 しゃくそん || 釈迦牟尼のこと。百結 ひやくむす || 多く結ぶ。伽薩 きやざ || 人の退屈を慰める座、また、その人。憐れむ || 憐れむ。貧賤 ひんせん || 貧しいと身分が賤しい

と、貧しく賤しい。聖賢 せいけん || 聖人と賢人。休 きゅう || 休む、憩い、窮す。乞い こ || 要請 頼む。請け う || 要請 受ける。看 み || 見る。跼 てつ || 蹉跎 躓く、足を踏み

外す、越える、度を過ぐす、走る、過つ。跏 か || 胡座をかく、足を組む、かかとを腿に乗せて座る。大藏 だいぞう || 沢山収蔵する。經 きよう || お経、教典。

釈文 多くを結ぶ伽の座に君憐れむべし、貧しく賤しく憩うは將に聖人賢子に易すし、請う看よ托鉢に度をすご

して胡座をかいた後、説き出す多く蔵する經八千。 あぐら せう

126 錦水即事

きんすいそくじ
錦水即事

寒日無光照晚汀

かんじつ 光 無く晚汀を照す
ばんてい

水枯錦水々冷々

水 枯れて錦水々 冷々たり
か せんすい みず れいれい

土人多少携筓去

土人 多少とも筓を携えて去る
どじん せん たずさ

筓得香魚瘦似釘

筓は香魚を得たるも瘦せて釘の似し
せん こうぎょ や てい いじ

語釈

きんすい 錦水 錦川、錦帯橋の架かる川。 即事 即事 二 その場での出来事、目の前の景色ようす、その場の事を詠じた詩。 寒日 寒い日。 汀 汀、水際

の平地。 冷々 清々しい、清らか、冷たいさま。 土人 土地の人。 携え 携行、持つて。 筓 伏せ籠、魚を捕獲する。 香魚 鮎。 瘦せ 瘦せる。 釘に似

る 二 釘に似る、釘のように瘦せて。

釈文

寒い日光無く夕方の汀を照らす、水が涸れても錦川の水は清々しく、土地の人多少伏せ籠を携えて去る、

伏せ籠で得た香魚は瘦せて釘のようである。

127 赴江崎途中即事

江崎に赴く途中即事

在位可知尽是賢

在位 知る可し 尽く是れ賢なり

到辺富國策無辺

國は富む辺りに到りて策は無辺

夾堤遍種千株楮

堤を夾んで遍く種う千株の楮

填海作成万頃田

海を填めて作り成す万頃の田

畝々黄雲水稻熟

畝々の黄雲 水稻 熟す

村々白雪木綿連

村々の白雪と木綿を連る

潜夫今日深慚愧

潜夫 今日の慚愧 深し

欲火舊時濟世篇

舊時 火んと欲す濟世の篇

語釈

江崎地名。赴く訪れる、行く。途中中途、道中。即事その場の事を詠じた詩。在位位に在る、位に就いている間。富國國力の増

進。策無し方法、施策。辺り周辺、辺り。堤堤防、土手。遍く隅から隅まで。楮楮紙の材料になる低木。填め埋め立て、充填。万頃

一万頃。古代中国の面積の単位、頃は百畝をいう約三千坪。水稻水耕の稲。熟す成熟、熟れる、穰。村々幾つもの村。白雪白い雪。木綿木

綿の木、綿の木。連る繋がる、連ねる。潜夫潜む男、隠れる人。慚愧恥じる。舊時古い時、昔日。欲す望む、求める。濟世世を救う、人

民の困難を救う。篇へん＝札、字を書きつける札、本。畝々うねうね＝畝また畝、畝が沢山に。黄雲こううん＝黄色の雲、稲の色。

釈文 位に就いている間を知るとよい、尽く是賢人である、國は富む辺りに到るも施策は辺りにない、堤を夾んで

隅から隅まで千株せんかぶの楮こうぞを、海を填めて作り出す万頃まんけいの田。畝うねと云う畝うねに黄雲こううんのように水稻すいとうが熟す、村と云う村に白

雪と木綿もめんが連なる、潜ひそむ人今日の慙愧ざんきに深い、昔日やふを火んと思ひ人民の困難を救う書を、